

研究種目：基盤研究（C）
研究期間： 2007 ～ 2009
課題番号：19520469
研究課題名（和文） タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育の教育効果の検証と実践モデルの開発

研究課題名（英文） The effect of the method of content-based-instruction with academic tasks and the development of its teaching model

研究代表者 山本 富美子（YAMAMOTO FUMIKO）
武蔵野大学・文学部・教授

研究者番号：50283049

研究成果の概要（和文）：

「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」では、社会科学系の一般教養的内容を学ぶ中で、6つのアカデミック・タスク（スピーチ、討論、図表解説、ディベート、調査、レポートとプレゼンテーション）を課し、教養教育と言語教育を同時に行う。この教育方法に対する学生の満足度は高く、教育効果も従来の文法・文型・語彙中心の言語構造的知識教育に比べて高い。しかし、この教育方法に対して、文法・文型・語彙教育が不十分だと、不信感を表す日本語教師は多い。そこで、現在、この教師ビリーフの転換を促すため、当該教育方法の実践モデルと指導書を開発中である。

研究成果の概要（英文）：

In the method of content-based-instruction with academic tasks, students learn liberal arts in social science and implement six academic tasks such as speech, discussion, explanation of data and figures, investigative reports, research papers and their presentation. With the aim of educating in liberal arts and academic Japanese language, this method is more effective than the previous audio-lingual method which mainly consisted of exercises in grammar, sentence patterns, vocabulary, etc. The content-based method is also highly evaluated by students. On the other hand, many Japanese language teachers are skeptical about this method because of the insufficiency of exercises with language structures. Now we are developing an approach to this teaching model which should help such teachers change their beliefs.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000円	150,000円	650,000円
2008年度	600,000円	180,000円	780,000円
2009年度	800,000円	240,000円	1,040,000円
年度			
年度			
総計	1,900,000円	570,000円	2,470,000円

研究分野：日本語教育学

科研費の分科・細目：言語学、日本語教育

キーワード：アカデミック・ジャパニーズ、コンテンツ・ベース教育、タスク・シラバス、教師ビリーフ、学習者による評価、課題発見・解決能力、論理的思考力

1. 研究開始当初の背景

言語構造的知識教育による受身的授業から、学習者自ら主体的に学ぶ自律的学習へと、言語教育方法の改革が唱えられて久しい。しかし、今日でもその改革の声に終止符が打たれることはない。それは、これまで多くの「自律的学習」が、「学習者を単に主体とした活動」を断片的に組み込むことに終始していたからではないかと考えられる。

自律的学習を真に円滑に進めるには、初級から上級にかけて、用意周到なシラバスの下に綿密に練った授業設計が必要となる。本研究代表者は、まず初期段階における音声・音韻教育の重要性を唱え、それがその後の語彙・文法項目の定着を促すとともに、学習者の自律的学習行動を高め、コミュニケーション能力の向上に重要な役割を果たすことを指摘した。その上で、中上級段階ではコンテンツを重視したテーマ別の読解・聴解を通して、学習者自ら考え調べたことを、スピーチ、討論、ディベート、調査報告、レポート・プレゼンテーションにより、論理的・分析的に文章・口頭で表現する自律的学習、すなわち「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」が4技能を総合的に高める上で効果的であることを示し、教科書の開発を進めた。

ところが、この教科書の試行段階で、日本語教師の印象評価と学生による授業評価に大きな食い違いがあることが判明した。特に、「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」未経験の新任教員は、「この教育方法は学生にとって難しすぎて教えるににくい」という印象を抱き、この新たに開発した教科書でも、従来の文法・語彙教育中心の教育方法

で教えていた。それに対して、学生の方はその大半が、この新教科書による「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」は他の日本語科目に比べると「やや難しい」と感じながらも、「教科書・教材は適切」であり、「授業内容も十分理解できた」と答え、「言語能力が向上した」と7段階評価の最高評価をした学生は半数以上も占めていた。実際、成績も、事前・事後テストで行っている日本語能力試験では「平均値」が5~8%も高くなっており、新任教員の印象とは全く異なっていることが明らかになった。

2. 研究の目的

本研究では、これまで開発を進めてきた「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」の教育効果を検証し、教育効果の高い授業の実践モデルを教員に提示する。具体的には以下2点について調査研究を進め、「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」の教育効果を最大限に高め、言語教育の質的改善に資することを目的とする。

- (1) 「言語構造的知識教育」を中心とした授業と比較・分析し、「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」の効果を高めている教育項目を選定してシラバスを精緻化し、教師用指導書とともに具体的な授業の実践モデルを提示する。
- (2) 「言語構造的知識教育」型の授業を好む教師の言語観と比較・分析し、「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」実践に向けた言語観への転換を図るための教員研修のあり方を検討する。

3. 研究の方法

(1) 学習者による授業評価

「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」と「言語構造的知識教育」の異なる授業について、学習者の行った評価データを統計的に分析する。また、「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」で学生が高く評価している項目と、学習観・学習方法についてアンケートおよび面接調査を実施する。

(2) 教育方法と教育効果の関連に関する調査
スピーチ、討論、図表解説、ディベート、調査・報告書、レポート・プレゼンテーションの6つのアカデミック・タスクによる活動の評価と、事前・事後テストの日本語能力試験との関連を見る。

(3) 教師ビリーフに関するアンケート・インタビュー調査
日本語教師の言語観と教育方法との関連についてアンケート・インタビュー調査を行う。

(4) 「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」の実践モデルの開発
上記、(1)～(3)の結果を踏まえた上で、6つのアカデミック・タスク（スピーチ、討論、図表解説、ディベート、調査、レポートとプレゼンテーション）による授業実践モデルを示し、教員向け指導書を開発する。

4. 研究成果

(1) 「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」に対する学習者の評価
当該の教育方法に対する学生の授業評価を継続的に調べた結果、常に平均値を大幅に上回っていた。このことから、この教育方法に対する学習者の満足度は高いものと結論された。以下、学生が高く評価した点をまとめる。

従来の文型練習やロールプレイは、与えられた課題を授業の中でこなすだけなので、それが現実場面で役に立つとは思えなかった。それは、テストのための練習だと思っていた。

しかし、この授業方法は、①実際に自分であるいはチームで文献やデータを調べたり、②調査をして自分なりの分析をし、③説明・意見交換を行ったり、④一定の書式でレジュメや報告書を書き、⑤それに基づき発表、討論をした。しかも、⑥それが評価につながっているので、テストのための暗記練習とは違

って、実際に社会に出て役に立つのではないかと思った。⑦実践を通して、難しい語彙・表現に対する抵抗感も減り、⑧皆の前で発表することにも慣れた。

ただし、成績評価の方法に対しては、最初は何を評価されるのかわからなかったので不安だったと訴えている。しかし、それも、教員だけでなく、自己評価・相互評価によるフィードバックによって、みんなかなり正当な評価をしていることが、後にもらった実際の成績評価で確認できたため、結果的にこの評価方法でよかったと考えていた。

(2) 「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」と教育効果の関連
当該の教育方法を実施する前に行ったプリテストと、実施後に行ったポストテストの結果について4期分を継続的に調べた結果、全ての学期で顕著な伸びが見られ、有意差が確認された。「言語構造的知識教育」を主とする他の教育方法に比べ、特に、読解・聴解・文法テストでの伸びが著しかった。また、作文力・発表力を加えた4技能の伸びについても、プリテスト・ポストテストでは確認できないが、教員による技能評価、学習者による相互評価の平均値を見ると、著しく伸びていた。さらに、レポート・プレゼンテーションの評価も、この教育方法になってから全体の平均値が上がっており、課題発見・解決能力、論理的・批判的表現力も高まっていることが確認された。このことから、山本（2008：論文③、学会発表発表③）で示したタスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育の教育効果が再検証されたと言える。

(3) 教師ビリーフと教育方法の関連
インタビュー調査をした20名の教員の大半が、従来の文法・文型練習に対する教育方法を高く評価している。実際、中級・上級の日本語の授業で、文法・文型・語彙練習のための時間を確保している。それは、上級段階の読解教育でも同様である。評価は、文法・文型、語彙・表現の言語知識を問うテストを各学期で数回行い、それらのテストの「客観的数値」の結果によって評価していた。

最近、初級・中級段階から、学期の最後にスピーチやプレゼンテーション、またはディベートを課しているところも増えている。しかし、そのような場合でも、その過程で行われる文法・文型、語彙・表現の言語知識を問うテスト結果による評価比率が圧倒的に高い。スピーチやプレゼンテーションなどの評価は主観的であり、学生に説得的な説明ができないと考え、最後のお祭りのな活動として行われていた。

- (4) 教師ビリーフの転換を促す「タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育」の指導法と実践モデルの開発

文型練習をしなければ日本語教育ではないという教師ビリーフの転換を目指し、現在、6つのアカデミック・タスクによるコンテンツベース教育によって、文型・語彙表現の定着を促し、課題発見・解決能力、論理的表現力を養成するための指導法および授業実践モデルの執筆に取り組んでいる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 山本富美子、糸川優、渋谷倫子、副島健治、戸坂弥寿美、星野智子、企業が期待する外国人「人材」の能力とビジネス日本語、専門日本語教育研究、専門日本語教育学会、査読有、第10号、pp. 47-52、2008.
- ② 大島弥生、二通信子、因京子、山本富美子・佐藤勢紀子、「大学・大学院の学術コミュニティへの新規参入者に対する日本語表現能力育成の可能性」、『大学教育学会』査読有、pp. 59-61、2008.
- ③ 山本富美子、論理的表現力を養成するタスク・シラバスによるコンテンツベース教育、日本文化論叢 (第四回中日韓文化教育研究国際フォーラム論文集)、大連理工大学出版社、査読有、pp. 60-74、2008.
- ④ 二通信子・大島弥生・因京子・佐藤勢紀子・山本富美子、「アカデミック・ライティング支援のための表現集の開発一分野を超えた論文の構成要素抽出の試み一」『日本語教育学国際研究大会』査読有、4pp、2008.
- ⑤ 山本富美子、音声言語理解のメカニズム一中国語系話者の日本語破裂音の弁別能力と聴解力をめぐって、博士学位論文(名古屋外国語大学)、2007.
- ⑥ 工藤嘉名子、「口頭発表レジュメの段階的指導の試み一超級レベルの留学生を対象とした実践例一」『日本語教育学研究への展望』(藤森弘子他編)、PP. 389-407、ひつじ書房、2009.
- ⑦ 工藤嘉名子、坂本恵、横田淳子、田山の子、小林幸江、菅長理恵、「東京外国語大学の『JLC 日本語スタンダード』に基づいた口頭表現指導」、『日本語教育学世界大会予稿集 2』査読有、pp. 255-258、2008.
- ⑧ 岬 里美、「発信志向を持たせる「基本科目」の展開一『国境を越えて』を使用した上級前期10レベルの授業」『日本語と日本語教育』38号、慶應義塾大学・日本語日

本文化教育センター、pp. 73-95、2010.

- ⑨ 岬 里美、「『オリエンテーションセミナー』から『上級後期・調査発表』ヘーディベート形式の討論を検討する一」、『日本語と日本語教育』第36号、査読無、pp. 153~177、2008.

[学会発表] (計13件)

- ① 山本富美子、大学・企業が求める口頭表現力とその教え方一タスク・シラバスによるコンテンツベース教育の実践より一、第8回アカデミック・ジャパニーズ研究集会、2009、東京国際大学早稲田サテライト
- ② 山本富美子、タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育の教育効果と今後の課題、コンテンツベース教育研究会、2010、武蔵野大学
- ③ 山本富美子、レポート・論文作成の構想段階における思考・作業プロセスの可視化の試み一レポート・論文作成支援ツールの開発にあたって一、平成20年度春季日本語教育学会春季大会予稿集、pp. 157-162、2008.
- ④ 二通信子、大島弥生、佐藤勢紀子、因京子、山本富美子、大学・大学院の学術コミュニティへの新規参入者に対する日本語表現能力育成の可能性一専門日本語教育分野の蓄積からの支援策を考える一、大学教育学会第30回大会、2008.
- ⑤ 二通信子、大島弥生、佐藤勢紀子、因京子、山本富美子、アカデミック・ライティング支援のための表現集の開発一分野を超えた論文の構成要素抽出の試み一、日本語教育国際研究大会、韓国プサン外国語大学、2008.
- ⑥ 山本富美子、糸川優、渋谷倫子、副島健治、戸坂弥寿美、星野智子、「企業が期待する外国人人材の能力分析とその養成法」専門日本語教育学会、大阪大学、2008.
- ⑦ 山本富美子、大学・企業が求める口頭表現力とその教え方一タスク・シラバスによるコンテンツ・ベース教育の実践より一、第8回アカデミック・ジャパニーズ研究集会、2008.
- ⑧ 瓜生佳代、タスク・シラバスによるコンテンツベースの日本語教育実践一ディベートタスクを例に一、欧州日本学会、2008.
- ⑨ 甲斐朋子、コンテンツの理解から図表解説のタスクへ一実践を通して見えてきたもの一、コンテンツベース教育研究会、武蔵野大学、2010.
- ⑩ 工藤嘉名子、「内容に深みのある口頭表現能力を養うために一上・超級クラスの実践

から見えてきたこと-」、コンテンツベース教育研究会、武蔵野大学、2010.

- ⑪ 工藤嘉名子、「アカデミック・プレゼンテーション能力を養うためにーコンテンツ・ベース教材を用いた段階的指導法」教育GP「世界的基準 となる日本語スタンダードの構築」シンポジウム「大学におけるアカデミック・ジャパニーズの現状と課題」東京外国語大学、2010.
- ⑫ 岬 里美、『国境を越えて』を使用した慶應義塾別科・上級前期 10 レベルの授業ー「学習者の主体性を引き出す」授業へ向けて、コンテンツベース教育研究会、武蔵野大学、2010.
- ⑬ 松永典子、大学の初年次教養教育における人材育成ー日本語表現活動を通して対人関係構築へー、コンテンツベース教育研究会、武蔵野大学、2010.

〔図書〕(計7件)

- ① 二通信子、大島弥生、佐藤勢紀子、因京子、山本富美子、レポート・論文のための日本語表現ハンドブック、東京大学出版会、pp. 218、2009.
- ② 山本富美子、第二言語の音韻習得と音声言語理解に關与する言語的・社会的要因、ひつじ書房、pp. 275、2009.
- ③ 山本富美子、工藤嘉名子、増田幸子、国境を越えて 本文編 (改訂版) 重版(3刷)、新曜社、159、2009.
- ④ 山本富美子、国境を越えて 語彙・文法編、新曜社、229、2008.
- ⑤ 山本富美子、工藤嘉名子、増田幸子、国境を越えて 本文編 (改訂版) 重版(2刷)、新曜社、159、2008.
- ⑥ 山本富美子、瓜生佳代、甲斐朋子、国境を越えて タスク編、新曜社、196、2007.
- ⑦ 山本富美子、工藤嘉名子、増田幸子、国境を越えて 本文編 (改訂版)、新曜社、159、2007.

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本富美子 (YAMAMOTO FUMIKO)
武蔵野大学・文学部・教授
研究者番号：50283049

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者

甲斐 朋子 (KAI TOMOKO)
関西外国語大学・留学生別科・非常勤講師
研究者番号：40331136

工藤 嘉名子 (KUDO KANAKO)
東京外国語大学・留学生日本語教育センター・准教授
研究者番号：80376813

松永 典子 (MATSUNAGA NORIKO)
九州大学大学院比較社会文化研究院・准教授
研究者番号：80331114

岬 里美 (MISAKI SATOMI)
慶應義塾大学・日本語日本文化教育センター・専任講師
研究者番号：60296770

瓜生 佳代 (URYU KAYO)
ヤギエウオ大学 文献学部東洋学研究所日本中国学科・日本語講師
研究者番号：